

## 巻頭言

### 工作技術センターとの41年

理学研究科長 市村彰男



所属：理学研究科 物質分子系専攻

専門分野：分析化学

趣味：バドミントン

今年度で定年を迎えます。工作技術センターとの付き合いは1969年に修士の学生入学から数えますと41年間になります。その間センター、歴代のセンター職員およびセンター利用者委員会の教員の皆さまには大変お世話になりました。この場をかりてお礼を申し上げます。

センターとの最初のかかわりは修士に入学してすぐ、1985年のセンター設立前の理学部金工室でL材を切ってアングルを組み立てたり、恒温槽用のリレー回路の作製でシャーシーにボール盤で穴をあけたりすることでした。しばらくして、真鍮丸棒にねじを切る必要が生じて、技術職員の香川さんに教をいただいたのですが、なにしろブキッチョなわたしなので、結局見かねて香川さんに全部してもらおうこととなりました。その後教員になってからも今まで、唯一テフロン丸棒を旋盤で正確に削ることはできましたが、金属の工作はすべてお願いするに至っています。

ガラス工作部門には、私の専門の電気化学測定用の溶液セルを多く作っていただきました。電気分解の効率は、3つの電極の位置関係と、それらの電極の電解質溶液相の間の液絡が重要なのですが、最初のうちは変に凝って設計し、当時の技術職員の酒井さんや続木さんには設計図どおり作成して頂きました。ところが凝りすぎて液絡部の抵抗が大きく電解効率が悪いセルとなり使用しませんでした。ごめんなさい、紙面上でお詫び申し上げます。このような苦い経験を活かして、分析化学会誌の総説「失敗から学ぶ分析技術のコツー電気分析化学」に書かせていただきました。

工作技術センターの談話会「火の祭」も今年で24回目を迎えましたが、第1回はガラス工作室の2階で7、8名の参加のもとで行われました。講演とその後の懇親会というパターンは第1回から継続されていて、私も何回目か忘れましたが講演をさせていただきました。

私とセンターとの41年間のかかわりということで書かせていただきましたが、研究生生活を振り返ると、あらたな学問を創造するには独自の実験器具を作製し用いることが非常に重要であったと思います。よい研究には良い技術者が必要ということで、今後ますますの工作技術センターの発展をお祈りします。